森林に着目した視覚伝達デザインの表現研究

Research on Visual Communication Design focusing on Forests

■　小木曽理緒　Rio KOGISO

愛知県立芸術大学大学院　和祐里研究室

Aichi University of the Arts

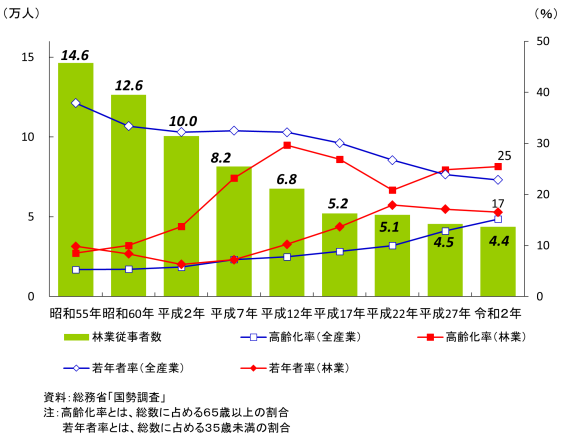
■　キーワード：森林　視覚伝達デザイン　グラフィックデザイン　表現研究

はじめに

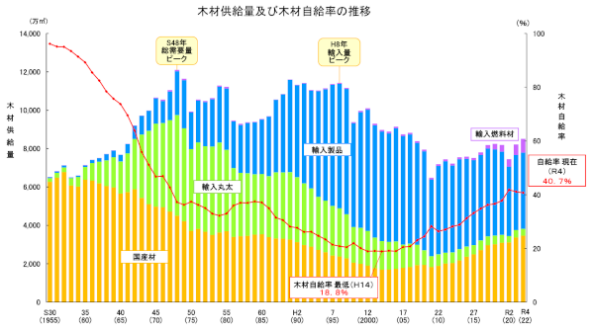
本研究は、自身が森林に入ったことをきっかけに出てきた興味を探求し、研究背景も踏まえて意識がない人々に意識を向けさせ、最終的には人間社会が持続的に森林と共生し続けることを目的とした表現研究と、ビジュアルコミュニケーションデザイン作品を制作する。

研究背景

今の森林と人の関係は崩れつつあるのではないか。日本は世界有数の森林大国であり日々私たちの生活に豊かさと潤いをもたらしてくれる。しかし近年、林業を担う人々が減少しており森林の管理が困難になっていること、国産木材の利用が伸びずに適切な手入れが行われず、結果として土砂災害などの自然災害に発展するといった様々な問題が存在しているというのが現状である。しかし、この現状を認知しておらず、森林自体に意識を向けていない人々が多いことが課題である。



資料：総務省「国勢調査」
注：高齢化率とは、総数に占める65歳以上の割合
　　若年者率とは、総数に占める35歳未満の割合



研究内容

これらの背景から問題を解決する。まずは実際に森林に意識を向けてくれる入り口となるような表現研究を行っていく。その表現研究を経て、表現研究の成果をどのメディアで展開していくのかを検討する。この研究を通して、最終的に現代社会を生きる人々に森林の持つメッセージを伝達し、人々が森林に寄り添うことができる社会を形成する。

研究方法

これまで以下の方法で研究・制作を行ってきた。

【リサーチ】
- デスクトップリサーチ
- 取材
- フィールドワーク

【表現研究】
- 葉拓
- 森林縮尺モデル

【リサーチ】

―デスクトップリサーチ

これまでの森林に関するプロジェクトの事例の他にグラフィックデザインを利用している森林に関連している事例もリサーチし、収集していった。

―事例

・「東京ミッドタウン　リレキの丘」

都市空間での森林再現を目指した期間限定のインスタレーションを作り出していた。

・「バーチャル森林浴　by Panasonic」

パナソニックが開発したシステム。プロジェクターとスピーカーを使用して森林浴を体験できる空間を作った。

―取材

デスクトップ上では森林や林業に関する情報量に限界を感じ、より専門的な知識を得るために北海道で林業を営んでいらっしゃる北村林業株式会社　代表　北村昌俊様に実際にお話をお伺いした。

主にお伺いした内容は、

・森林メンテナンスするにあたっての細かい手順
・森林を管理する上で一番大切な時期
・林業をする上での一年を通しての間引きや間伐の回数

を中心に質問に答えてくださった。

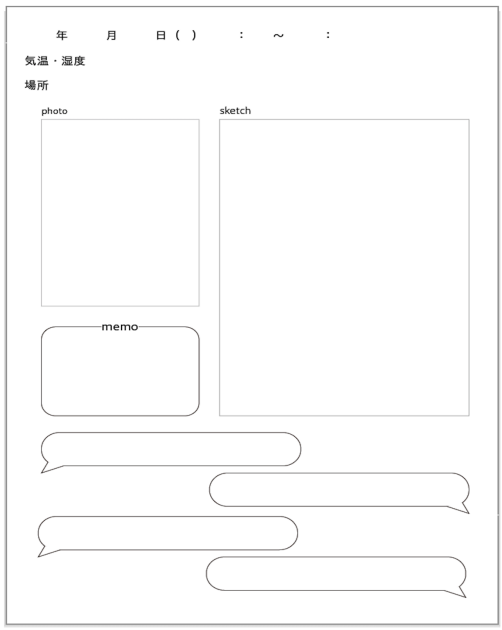
「林業に正解はない」という前置きのもと、丁寧にご教授していただいたのち、最後に「林業に携わっていない私たちに求めていることは何かありますか」と質問した際、「森林に意識を向けてもらえるだけで嬉しい」という回答をいただき、改めてこの研究をする意義を考える大きなきっかけとなった。

―フィールドワーク

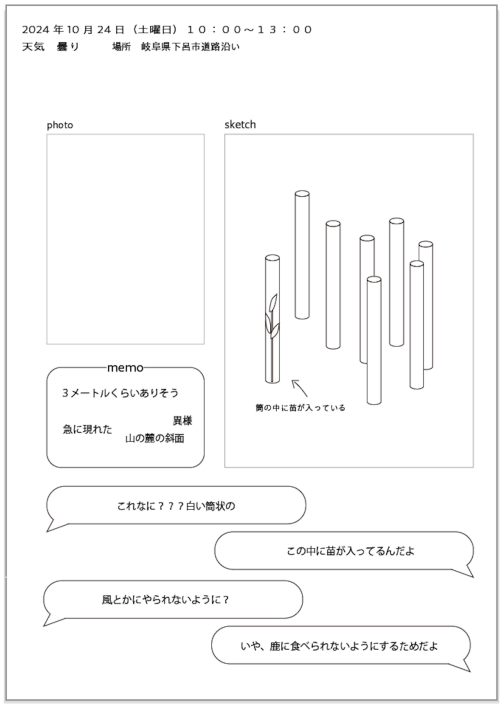
10月下旬に、長年林政に携わっている父と共に下呂市の南飛騨健康推進センター一帯の森林を散策した。気になる箇所がある都度父に問いかけ、その問いに答えてもらい、森林管理に関する知見を得た。

ここで得られた情報や仮説、また私が感じた疑問や興味は、森林に対して意識が向いていない人たちにとって非常に有益かつ、意識を向くことができる入り口になるきっかけになるのではと仮定した。

そこで「森林散策簡易調査票」を作成し、今後父と森林に出向いた際や、単独で森林散策に行った際にすぐにメモを記すことができるようにした。そしてこの調査票をファイリングし、リサーチの集積を可視化することにした。



森林散策簡易調査票



森林散策簡易調査票（記入例）

【表現研究】

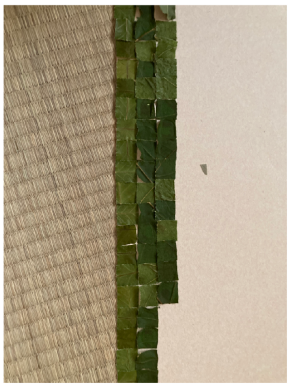
―葉拓

葉はいつか朽ちていくものである。生きているその一瞬を一生記録できる葉拓に魅力を感じ、行うこととした。葉拓と同時並行で、デジタルスキャンも行った。

森林縮尺モデル

　愛知県立芸術大学内の特定の木の葉を採取し、それらをチップ状にして均等に貼り付ける森林縮尺モデルを制作した。
　一辺2.5 センチの正方形のアルミパイプの先端をヤスリで鋭利にし、鋭利にした面を葉に押し当て正方形の葉のチップを量産させていった。

そのチップを最初は B1 サイズに貼っていった。しかし、この研究においてたくさんの人に見てもらうためには B1 サイズでは作品の移動やサイズ感からの森林の想像が困難だと結論づけた。



そこで、スケールが大きい森林という存在を普段人々が使用しているA4サイズに縮小して、葉のチップを貼っていくことにした。

時間が経過し、枯れて取れていった箇所にまた新しい葉で貼り直していった。

　この作品を通して、三つにフォーカスしたアプローチができるのではと仮説を唱えた。

―時間

森林と言えるようになるまでに 60~100 年かかると言われている。その時間を葉に置き換え時間尺を視覚化することで森林の成り立ちを認識しやすくなる。

―スケール

規模の大きい森林の縮尺を小さくして表現することで鑑賞者に身近に感じてもらうことが可能になる。

―行為性

葉を貼っていく行為や葉が枯れて剥がれ落ちた箇所にまた新しい葉を貼り直す行為が、森林メンテナンスに繋がる部分があり、森林を人の手によって管理されていることを表現していることになると考えた。

今後の研究計画

フィールドワークを重ねていきながら、森林管理や林業政策に関する知見を深めていく。フィールドワークでファイリングした情報をどのようにグラフィックで可視化して作品として落とし込んでいくかを試作を重ねていきながら研究と制作を続けていく。

引用

https://www.rinya.maff.go.jp/j/routai/doukou/index.html
林野庁　国勢調査
https://kashida-m.co.jp/column/202312_03/
木材供給料と自給率の推移
https://www.tokyo-midtown.com/jp/event/designtouch/logginghill.html
東京ミッドタウン　リレキの丘
https://www.workersresort.com/articles/new-trend-of-well-being/　Workers RESORT